

鳳来寺田楽演目一覧

(1) 御神酒いただき

笛尉、さいとう、神天子など田楽衆一同が決められた位置につき、田楽の始まりとして、御神酒をいただく。

正面に獅子頭を飾り、両側に向かい合って座り、御神酒をいただく。

(2) 九度のこと

笛尉が笛を吹き始め、楽ねぎが太鼓を打ち、4人のえぼしが右の手の鈴を振りながら舞う。

(3) かんばやしのこと

九度の時の位置で笛尉4人が笛を吹き、楽ねぎが太鼓を打ち、ほかの者が扇子を持ち、鈴を振りながらはやす。この時のはやしことばは早口言葉で「国づくしを唱える。

(4) 松竹ばやしのこと

この時の歌詞は、五穀豊稔、天下安穩の祈願である。

(5) 国づくしのこと

これも太鼓を打ち、鈴を振りながら舞う。鳳来寺、峯楽師をはじめ、天下の神々に天下安穩を祈願することばを唱えるのである。(2)の九度のことからこの国づくしまではすべて祈願の行事である。

(6) 五番の舞のこと

これは、お願の舞として、参詣の人々のために、災難滅除の大祈願として奉仕するものである。この舞から(9)の仏の舞までは、同じ形で5人のえぼしが真中に出て舞うのである。

昔は庭田楽として外に出て舞ったものである。いずれも祈願の舞であり、三鬼に対する追善供養のためのものといわれている。

ここでは式として舞うが、あとで他の演目の途中で祈願希望者からの要望でこの舞を行うことがある。

(7) 万才楽のこと

五番の舞の形で鈴と扇を持って舞う。この舞は熱田神宮などで行われている踏歌の余韻を残しているといわれている。

(8) 鶯の舞のこと

この舞は鳳来寺田楽の中で笛の調子が最もよいものである。

(9) 仏の舞のこと

これも5人のえぼしの役で、手に扇と鈴を持って笛と太鼓に合わせて舞うのである。鶯の舞とほとんどおなじである。

(10) 御礼のこと

さいとうの役で、かるさん・赤だすきに長い太刀をさし、面を付けて踊る。神前へ向かって跳ぶような踊りである。

(11) 松のらんじのこと

笛尉4人、太太鼓1人、さいとうが松と扇子を袷にさして踊る。

(12) 扇のおがみのこと

さいとうの役。扇を広げ神前に向かって三度拝む。

開いた扇に両手を合わせ、上体を仰向けに大きく反らし、次は大きく前にかがんで礼をする。この所作を繰り返して、最後に神前に向かって大きく三足跳び「おっとめでたし」と叫んで終る。

(13) 棒のらんじのこと

さいとうの役。棒を前につき出し笛の調子に合わせて手の指で棒を削るような所作を神前、東西、三方に向かって行い、最後に神前へ三足跳んで「おっとめでたし」と叫んで終る。

(14) 棒の祝いのこと

棒のらんじに続けて行うもので、棒を持ったさいとうが唱えごとをする。ここで印を結んで棒をなでるところに、昔の古い舞楽の舞の手を見ることができるといわれている。

(15) 神天子の舞のこと

稚児が鼓を持って出て笛と太鼓に合わせて舞う。

(16) 一、二の舞のこと

この舞にはささらが二人加わる。

これはささら二人の舞であり、前の神天子の舞と同じである。

(17) 惣田楽のこと

この舞が鳳来寺田楽のなかで一番華やかな舞で、笛、太鼓、神天子、ささらなど9人の役が入り乱れて舞う、美しく賑やかな舞である。

(18) ろん舞のこと

田楽が済むとさいとうはそのまま居残ってろん舞に移る。

さいとうがささらを持って大きく振り回しながら神前に三足大きく跳び、引き返して鼓を持って同じ動作を繰り返して、三度目に太鼓を持って神前へ大きく三足跳び「おっとめでたし」といって終る。

(19) 面申のこと

さいとう、えぼしの役。天下泰平、五穀豊稔を長々と祈禱し、さいとうが大足に神前に三度出て唱えごとを大きく唱える。

(20) 次の面申のこと

しゅうとの面申ともいい、ささらの役である。これも前の面申と同じく祈願の唱えごとをする。この所作は万才の舞に似ている。唱えごとの最後に「三万七千余所の神たち、雲の上のむら神も、霞が上に行き立って、はなとこそよみ給え、松かけか時分な、さんもよかりけるこうとかな」と謡い終わると、さいとうが「すっべらぼう」と大声で叫ぶ。

(21) 獅子伏せのこと

さいとうと獅子の役。

伏せた獅子が起き上がろうとするのを、天狗面を付けたさいとうが頭へまわり、うしろへまわり、左右に飛び越えて押さえつけるような所作をする。これは、厄伏せ・魔除けの祈願の舞とされている。

(22) 打開きのこと

農耕の予祝。太鼓を田にみため、唱詞を唱えながら太鼓のまわりを回る。今は行われていない。

(23) なりわいのこと

稲作や畑作、養蚕の予祝。太鼓を打ちながら周囲を回る。今は行われていない。

(24) こいのりのこと

天下安穩を祈願することばを唱えるのである。今は行われていない。

(25) 鳥追い

ささら二人が交互に謡う。今は行われていない。

(26) 苗引きほこ楽のこと

鳳来寺田楽中最も異色のもので、きわめて野趣に富んだものである。生成発展の不可思議さに対する感情を露骨勇敢に表現したものであり、神仏とともに楽しみ、共に栄えようとする農民の純真な祈りを表現したものである。五穀豊稔を祈り人間の生成発展を祈願するものである。鳳来寺田楽中おおいに珍重されるものである。

(27) 弓納のこと

中央に太鼓をすえ、三の鼓二人が馬になって、一のささらが弓矢を持ってこれにまたがり、「てんばくなりわい」と祈詞を唱え始める。

これと太鼓の周りを同時にまわり始め、一まわりすると唱えごとが終り、一度馬から下りる。

次に神前に足早に進み出て「白紙納め」の詞を唱え、また引き返して馬に乗る。続いて太鼓を一まわりし正面に止まり弓の矢を放つのである。

この矢の飛ぶ方向によってその年の吉凶が判断されるという。

(28) 田うたのこと

これは、田うた納め、田うたじまいなどといって、弓納めのすんだ太鼓を取り巻き、かくねぎ以下全員のものが出て太鼓の上にもみを蒔きながら、ぐるぐるとまわる。この時の唱え詞は稲の豊稔を祈る占いことばである。